

大道芸アジア月報 2025年 6月

vol. 37, no. 6

編集・発行人 上島敏昭

〒165-0025 東京都中野区沼袋 2-31-2

春山荘・東

★大道芸案内

主な大道芸スポット（土・日・祝日など、通年大道芸が見られるポイント）

■大阪・天保山海遊館広場 <https://www.kaiyukan.com/thv/marketplace/>

■大阪パフォーマーライセンス <http://www.osaka-performer.com/index.php>

■名古屋・大須ふれあい広場 ■名古屋 POP UP ARTIST <http://popup-artist.com/index.html>

■しずおか大道芸の街 <http://shimarukai.org/> ■江ノ島大道芸 <https://www.fujisawa-kanko.jp/feature/daidoge.html>

■ヨコハマ大道芸（山下公園、グランモール公園、） <http://daidoge.jp/>

■中部大道芸ネットワーク <https://www.facebook.com/mrkrddg>

■仙台まちくるパフォーマーズ <https://machi-kuru.com/performers>

■東京都ヘブンアーティスト（「東京都文化生活スポーツ局—文化振興」で検索）

★浅草雑芸団の旅

△浅草雑芸団・木馬亭公演「あつという間の40年〜一睡の夢」○浅草木馬亭

●7月10（金）18：30 / 11（土）13：30

出演：浅草雑芸団 雑芸のかずかず、過去のゲスト出演者の秘蔵映像公開

ゲスト：「地獄絵」絵解き・竹澤環江（長野市西光寺）、あがた森魚ミニライブ

前売り¥3500（当日¥4000）

予約・問合せ：090-6142-0106（カミジマ）※早朝・深夜はご遠慮下さい

★今月の大道芸公演

△ソラマチ大道芸特別公演 THE サーカス <https://solamachi-daidoge.alchemist-magic.net/thecircus.html> ○東京ソラマチ

●5月31（土）6月1（日）

HOOPER MAEP、PEPPI THE CLOWN、ソランポ・ソラン、クラウン マスター、アスタリスクノヴァ、Witty Look、クラウン ゼン、魔法使いアキット、（総合プロデュース YOHEY）

主催：東京ソラマチ®運営：アルケミストマジック

△シルク・ドゥ・ソレイユミニステージ「アウアナ」 <https://www.alohafes.com/> ○恵比寿ガーデンプレイス

●5月31（土）6月1（日）両日とも11：00～11：20 / 14：00～14：20

アロハフェスティバル TOKYO のステージイベント

△第31回深川美楽市（のらくろ〜ド） <https://www.birakuichi.com/> ○江東区高橋商店街

●6月1（日）

ArtistaKAZU、エンジョイ Joy、クラウン*Roca、大道芸人ジニー、ストレンジ・ディッシュ、小林智裕、Near Plus、おろしぼんづ、PIRATA MICIO、淳慶仏、しろみときみ、mutako、-UNI DOLL-、まるとるま、Steam Jumper、黒鉄の剣闘士、木天蓼亭、POPIN! CANDY!、座る男〜お隣へどうぞ、片腕のマジシャン HAKU

△KAAT アトリウムプロジェクト ○神奈川芸術劇場アトリウム

●6月1（日）14:15 目黒陽介 with 坂本弘道

●6月7（土）17:15 目黒陽介 with イーガル

●6月14（土）12:15 目黒陽介 with Kacous limba

△おかげ横丁 夏まちまつり <https://okageyokocho.com/main/works/natsumachi2025/> ○伊勢神宮門前・おかげ横丁

●6月6（金）～8（日）

石原耕、ももっち、ゼロコ、加藤みきお&加藤ひろみち、かみしばい

△ソラマチ大道芸フェスティバル2025 <https://solamachi-daidoge.alchemist-magic.net/festival2025.html> ○東京ソラマチ

●6月7（土）7（日）

C3hamps、Funny Bones、Hiro&AG、Juggler Laby、KANA∞、LUNA、PANTOMIME COMEDY DUO GABEZ、Performer SYO!、RIKI、SAMESAME、

SPINATION、SUKE3&SYU、to R mansion、un-pa、サブリミット、シルヴプレ、ハイキングウォーキング、ぼん、めりこ

(#ミズマチ パフォーマー：サンキュー手塚、ひこひこ、ものまる、りずむらいす、G-jo OneManBand (油井ジョージ ワンマンバンド)、RIKI

主催：東京ソラマチ®運営：アルケミストマジック 総合プロデュース：YOHEY

△とおがった大道芸 <https://www.zao-machi.com/event/1575.html> ○山形県蔵王町遠刈田温泉

●6月7(土)8(日)

中国雑技芸術団、加納真美、芸人まこと、セクシー-DAVINCI、ブラックエレファーツ、結城敬介、もんたくん、川村建太、フレディーノ、ソランポ・ソラン

△ASPL アツギストリートパフォーマンスライセンス審査会 ○厚木市・中町花の公園 (小田急線「本厚木駅」)

●6月14(土) <https://www.city.atsugi.kanagawa.jp/soshiki/shogyonigiwaika/2/2333.html>

関口 大、Steam Jumper、国井 美和子、なにみてるの、GAKU、太平洋、東雲ゴールド、川村家、Box performer まさきち、ハッピーゴリラ®、大道芸人ヒヨコ、Performer Suga、ちんねん、あお、芸人まこと、大道芸人たくまる、湘南大道芸人ぐっさん

△エンターテイメント亀戸! vol.26 <https://www.kameidodaidoge.com/> ○亀戸十三間通り商店街

●6月15(日)

太平洋、Juggler 燎、Tento、タカパーチ、アストロノーツ、ジェンガ金次郎、しろみときみ、mutako、ハードパンチャーしんのすけ

△買い物公園まつり <https://www.kaimonokouen.com/event/7795> ○旭川平和買い物公園

●6月28(土)

ソランポ・ソラン、バルーンアーティスト Syotaro、望月ゆうさく、ニ助企画猿まわし

△きらり★ふじみサーカスパザール2025 <https://www.kirari-fujimi.com/program/view/730> ○埼玉県富士見市・市民文化会館

●7月11(土)12(日)

メインホール (有料公演) 『Life's a circus—人生はサーカスのようだ—』

演出：油布直輝 出演：Funny Bones、長谷川愛実、森田智博、長すみ絵、吉川健斗、Honoka、サゴ、油布直輝

両日とも13:30開演

一般¥1500、高校生以下¥800

日時指定、自由席、要整理券

申込み・問合せ：富士見市民文化会館キラリふじみ 049-268-7788

マルチホール (無料公演) 『駄芸スナックの昼下がり』

出演：天才イカレポンチ、バーバラ村田、どん・ぺんた、ジャグラー-KAZU、Kanon&Rio!

両日とも11:00開演 / 15:30開演

入場無料、申込み不要 (但し、状況により入場を制限する場合があります)

そのほか、かぼちゃサーカス団パレード、ジャグリング体験など

若林正の

食って極楽

これぞセンベロ!

堀切菖蒲園「京屋」

ワタシの出演舞台も、先日盛況の内
に無事千秋楽を迎えられた。その稽古
は、ずっと葛飾の堀切菖蒲園だった。
この町は以前ワタシの新婚時代を過
した地であり、友人 K 君のホームグラ
ウンドである。用事もあって稽古終了
後、会うことになった。場所はオスス
メの地元立ち飲み屋である。「京屋」昨
年10月に開店したばかりながら、K 君
初め地元の酒飲みから親しまれている
店だ。7,8人入ればいっぱいになる小
さい店だが、まず安い。

下町酎ハイという謎のシロップが入
った酒が¥250、ツマミは、ウマイ棒等
の駄菓子は¥50~、冷蔵ケースに並んだ
ポテトサラダや冷奴、チクワ等は¥200、
店名物の串揚げは¥150~、カツ煮や納
豆オムレツは¥400~、つまり酎ハイ二
杯にツマミをつけても千円で釣りがく
る! とはいえ美人で明るいママさん
と常連客の賑やかな雰囲気、イチゲ
ン客も自然と会話に巻き込まれて、つ
いつい杯を重ねてしまうのだ。ワタシ
も芝居のチラシを置かせてもらった
が、酔った勢いのセールストークで、
客五人にチケットを売ってしまった。
てなわけで、いつしか稽古帰りに店を
覗くことがルーティンとなり、半月ほ
どの間に常連の一人になっていた。



劇場入りの前日、これでしばらくこ
こには来られないのかなと思うと、な
んとも寂しくなったのである。

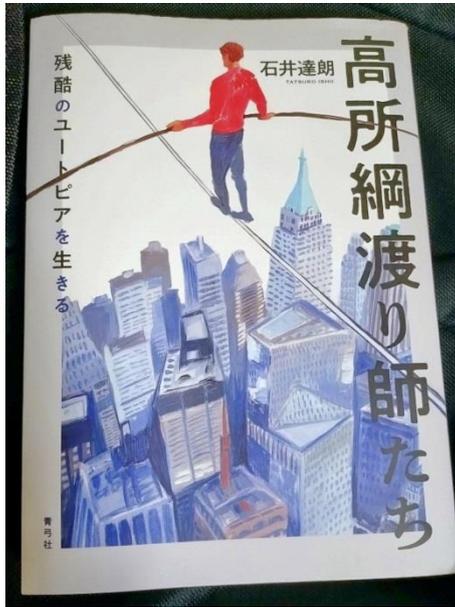
○用事無くても又来たい度=50ワカ
※写真撮り忘れ、下記より拝借。

<https://1000bero.net/restaurant-2244/>

書籍紹介『高所綱渡り師たち』

上島敏昭

○『高所綱渡り師たち—残酷のユートピアを生きる』石井達朗著、青弓社刊。3400円＋税



最初に書名を見ての印象は、「高所綱渡りって何？ 何かほかに言葉はないの?!」という、ちょっとした違和感だった。

書店で手に取って思ったこと。「えっ、高い!」

サーカスの本だからしょうがない、買うしかないか……。そんな思いで購入して、すぐに読みました。

結果からいえば、おもしろい本です。この欄で、いわゆる「書評」などということをする気はないので、単純に紹介します。面白そうだと思うたら、読んでください。

著者は、一般的には舞踊評論家として知られる。慶応大学名誉教授。サーカス関連の書籍として、『サーカスのフィルモロジー—落下と飛翔の100年』（新宿書房）、『サーカスを一本指で支えた男』（文遊社）、共著に『見世物小屋の文化誌』（新宿書房）などがある。

目次は次の通り、

第1章：ロープ上の途方もない可能性

第2章：ブロンディン…綱渡りの代名詞になった巨人

第3章：「ブロンディン」を名乗り、ブロンディンに挑む

第4章：体でジェンダーイメージをくつがえす女たち

第5章：当代最高の綱渡り師だった男の数奇な行路

第6章：勇気と実力で時代を走り抜けたザゼル

第7章：栄光と悲惨—綱渡り一族の壮大なる歴史

第8章：偉業か狂気か—SNSの時代にあえて仕掛けるワレンダー族の末裔

第9章：完全なる犯罪—創造するものはアウトローでなければならない

さきほど「サーカスの本」と書いたが、必ずしも正確ではない。各章は年代順に配置され、それぞれの章でその時代を代表する綱渡り師たちが紹介されるのだが、全員がサーカス芸人というわけではない。とくに第9章で紹介されるフィリップ・プティは、サーカスに在籍したことはあるが、本人は自分をサーカス芸人とは思っていないと思われる。

そう考えると、第8章で紹介されるニック・ワレンダなども、サーカス芸人という脈絡でみると「?」と思わざるをえない。ニックは、有名なサーカス一家に育ち、綱渡り芸を売り物にしているが、本書の眼目である「高所綱渡り」という点に着目すると、わざわざ莫大な借金をして、文字通り「命がけの綱渡り」に挑戦する。サーカスは見世物だから、失敗したら芸にならない、「絶対に失敗しない」というのがサーカス芸の条件だ。失敗するのではないかとハラハラドキドキさせて、みごとにやってのけることでお金を頂戴しているのだ。ほんとうに出来るかどうかわからない危険な行為を、借金してまでやるとしたら、それはサーカス芸人ではあるまい。

サーカスの本だと思って、私はこの本を読み始めたのだが、最後まで読み

進んで、命がけの空中歩行に取り憑かれてしまった人々の列伝だったということに気が付いた。

最初から順に、そこで紹介される人物とその年代を記してみる。

第1章で紹介されるのはマダム・サキ（1786-1866）。ナポレオンと同時代人で、綱の上でナポレオンに扮する一人芝居を見せたり、実際にナポレオンの目の前で、何度も綱渡りを演じていた。



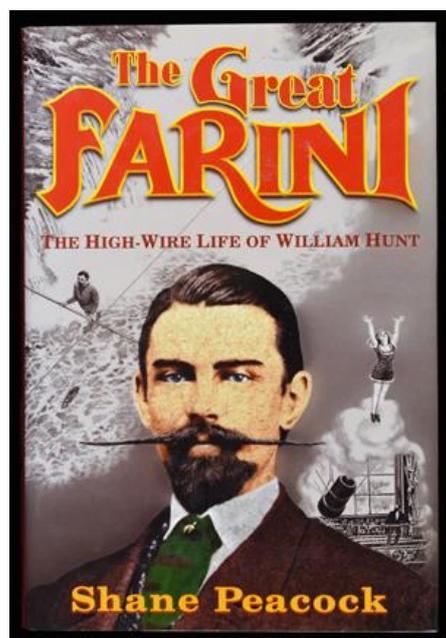
第2章で紹介されるのはブロンディン（1824～97）。フランスのアクロバット一家に生まれ曲芸の英才教育を受けてサーカス芸人になる。27歳でアメリカに渡ってサーカス芸人として成功する。1859年、ナイヤガラ瀑布での綱渡りを成功させて、綱渡りの第一人者として世界中に知られることになる。それ以降、ナイヤガラを綱渡りすることが綱渡り芸人としてのステータスとなる。

第3章ではブロンディンを越えようとナイヤガラに挑んだ人々を紹介する。なぜかつぎつぎに現れた「オーストラリアのブロンディン」たち。ヘンリー・レストレインジ、ジェイムズ・アレクサンダー、オンザーノ、ヘンリー・ベリーニ。そのベリーニの弟子、スティープン・ピア。などなど。

第4章は女性綱渡り師の列伝。セリーナ・ヤング。1862年遊園地の綱

渡りで失敗して大けが。セリーナ・パーウェル（1827～63）バーミンガムの公園での綱渡り中、事故死。マリア・ステルペリーニ（1853～1912）は1876年、女性ではじめてナイアガラでの綱渡りに成功した。

第5章に登場するウィリアム・ハント（1838～1929）は、P・T・バーナムとも並ぶサーカス興行師だが、バーナムほど知られていない。彼は若いころ、ファリーニと称する綱渡り芸人として鳴らし、その後、興行師・サーカス団長・発明家・著述家・園芸家などさまざまな仕事に業績を残す。彼については『ザ・グレート・ファリーニ』（シャーン・ピーコック著、1995年）と題する評伝から紹介している。



それによれば1860年、ブロンディンに挑戦するとしてナイアガラ渡りを成功させる。1862年には結婚したばかりの妻を背負ってナイアガラ渡りに再挑戦し、失敗。自分は助かるが妻は死亡する。その心身両面の傷をいやすため放浪ののち、興行師に転じ、人間大砲という新しい見世物芸を作ってもいる。

第6章はそのウィリアム・ハントが見出して育てた女性芸人ザゼル、ことローザ・リヒター（1862～1923）の紹介。イギリスで少女芸人として活躍ののち、ハントにスカウトされ、1877年、ザゼルと名乗って再デビュー。高所か

らネットへの飛び降り、高綱渡り、人間大砲の三つの芸を披露して人気を博す。その後、アメリカに渡り、リングサーカスの製作スタッフの男性と結婚。1880年ごろにはハントの元を離れたらしい。1889年ごろ、29歳で不慮の事故により引退。その後、61歳までどのような人生を送ったのかは、不明。

第7章はワレンダ一家の物語。まず2015年、マリオ・ワレンダ（1940～2015）の死亡記事を紹介する。彼は、1962年に「7人のピラミッド」と称する綱渡り芸に失敗して、二人死亡した事故で半身不随の重傷を負う。その後、半身不随で半世紀以上を生きたのが彼だった。この「7人のピラミッド」芸をつくったカール・ワレンダ（1905～78）もその事故のときメンバーに加わっており、その翌日にはピラミッドの芸を再生して公演しているという。ワレンダ一家は19世紀から21世紀の現在までつづくサーカス家系で、とくにカールは息子や娘たちを仕込んで「7人ピラミッド」を完成させ、「空飛ぶワレンダ一座」といわれサーカス界で知らぬ者のない一座を作り上げる。しかし、1978年、さほど困難とも思えない綱渡りに失敗し、死亡する。

第8章はその曾孫のニック・ワレンダ（1977～）の挑戦。祖父およびワレンダ一家の恥辱である「7人ピラミッド」と祖父が死亡した高所綱渡りの二つにリベンジして、成功させる。とくに「7人ピラミッド」は、祖父を越え、頂点に二人の女性を載せる「8人ピラミッド」にして成功させる。それによれば「8人ピラミッド」は倉敷のチボリ公園でやったというのだが、知らなかった。そのころ倉敷はよく行っていたのだけれど……。ナイアガラにも挑戦し、これはいままで誰もやらなかった滝壺の真上にロープを渡して歩行することに挑戦し成功させる。じつは1887年、度重なる事故を鑑みて、カナダは綱渡りを禁じていた。ニックはアメリカとカナダ、双方の担当

部署に足しげく通って嘆願し、放送局その他マスコミの応援もとりつけ、ようやく実現にこぎつける。しかし、安全対策や警備、消防、医療など諸経費は莫大で多額の赤字を背負うことになる。2013年にはグランドキャニオンを綱渡りし、これはネット配信され、1300万人が見たといわれる。それでも事故は起こる、2017年8人ピラミッドの稽古中に失敗し、5人がけがをしてうち2人が重傷。それでも現役復帰している。

第9章はフィリップ・プティ（1949～）は、1974年にニューヨークの世界貿易センタービルの二つのタワーの間を綱渡りしたことで知られる。2009年には日本でも「マン・オン・ワイヤー」のタイトルで映画が公開され、話題となった。同時に刊行された同名の自伝もある。



この綱渡りがいかに大変な作業であったか、映画を見ながら、まさに手に汗にぎったのを覚えている。彼はこのとき、ロープからビルに渡った途端に、待機していた警官に逮捕されている。許可を得ていないので、犯罪なのだ。では許可申請すればいいのだが、絶対に許可されない。なぜなら、危険だから。危険防止の対策をすればいいのだが、対策しないことが、彼のポリシーである。

じゃあ、なぜ、そんなことをするのか。この本に答えは書いてない。いずれの綱渡り師も、正常とは思えない。しかし魅力的だ。「あとがき」に難しいことが書いてあるが、ただ綱を渡るだけの、サーカスのなかではきわめておとなしい、この綱渡りという演芸、奥が深い。というのか業が深い。